

他者を理解すること

動物の知覚や行動の研究から、生き物にはそれぞれの独自の世界があることがわかっています。コウモリにはコウモリの、犬には犬の、生物固有の局所的な世界（環世界）があると考えられています。人間は一般的には視覚優位で世界をとらえていると言われますが、知覚のあり方によって世界の見え方は異なると考えられます。

時々新記録を達成した選手が「とても良い景色です」などと言いますが、大なり小なり、どんな人間も自分なりの景色（世界）を経験しているとも言えます。それは客観的な環境を字義通りに正確に把握したものではなく、自分の知識や経験、想像力を用いてその人にしかできない方法を用いて立ち上がってくるものとも言えます。その人の背負ってきた歴史と、時間の蓄積、そして環境との協調や対立を経たその人独自のものと考えられます。

私が若い頃に強い刺激を受けた横塚晃一氏（障害者自立生活運動のリーダー）は、自分にとっての最大の環境はこの脳性マヒの肉体であり、私の見る風景は健常者と言われる人とは別なのではないか、と言っています。そうであるとすれば、支援に当たる人間に求められることは（障害のある人など）支援を必要とする人の理解、それぞれが主観的に創りあげている景色をしっかりと受け止めることだと言えます。それは手近な言葉を使えば相手基準でその人をわかろうとする営みです。そしてそのためには自分の局所的世界へのこだわりをいったん脇に置き、何が良いのかは自分とは離れてあるかもしれないと考えてみる姿勢がよい結果を導くのではないかと私は考えています。

（平成 30 年 11 月）